第12回東北大学男女共同参画シンポジウム

科学とジェンダー

平成27年

11.21 土

13:00 ▸ 17:00

開催場所

東北大学星陵キャンパス
医学部開設
百周年記念ホール
（星陵オーディトリアム）

お問合せ先

東北大学総務企画部総務課
Tel. **022-217-4811**
Fax. **022-217-5906**
Mail. **danjyo@grp.tohoku.ac.jp**

東北大学男女共同参画委員会HP
http://www.bureau.tohoku.ac.jp/danjyo/

TOHOKU UNIVERSITY

ごあいさつ

東北大学 総長
里見　進

第12回東北大学男女共同参画シンポジウムを開催するにあたり、ご挨拶させていただきます。

東北大学は「研究第一主義」「門戸開放」「実学尊重」を大学理念としております。この大学理念の一つである「門戸開放」において、大正２（1913）年に本学は当時の国立大学として初めて３人の女子学生に対し、理学部への入学を許可しました。このような伝統と実績のもと、本学では平成13年に全学的組織として男女共同参画委員会を発足させて以降、「男女共同参画推進のための東北大学宣言」(平成14年９月)、「東北大学における男女共同参画推進のための行動指針」(平成25年）を策定し、全学をあげて男女共同参画社会の実現に向け鋭意取り組んでまいりました。

12回目を迎える今回のシンポジウムは、科学の知／科学者世界におけるジェンダーについて討論し、科学領域における女性研究者のさらなる活躍を目指し、「科学とジェンダー」というテーマで開催します。

本日は、来賓として文部科学省から小松弥生研究振興局長にお越しいただきご挨拶を頂戴することにしております。また、科学史とジェンダーに関する研究分野の第一人者である三重大学小川眞里子名誉教授、そして医学分野の科学知に対するジェンダーの影響について卓越した研究をされている明治学院大学柘植あづみ教授にも特別講演をお願いしております。日本における男女共同参画社会推進の第一線にいらっしゃる皆様に、大変お忙しい中お集まりいただくことができ、光栄に存じます。

また、昨年度より設立した「澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（通称：澤柳記念賞)」に関しては、予想以上に多くの応募があった中、日本の女性研究者の研究環境改善に貢献してこられた日本大学大坪久子上席研究員に本賞を、さらには中高生を対象として、大学院生による文理融合型の出前授業を積極的に行い、次世代の女性研究者の増加・活躍を促進する活動を行っている新大 Wits（新潟大学）に奨励賞をそれぞれ授与します。

今回のシンポジウムの成果が本学及び全国の大学のみならず、日本全体の男女共同参画社会の実現に大きく寄与できますことを祈念いたしましてご挨拶とさせていただきます。

平成27年11月21日

プログラム

総合司会　（男女共同参画委員会　広報・シンポジウム WG 座長　医学系研究科 教授）**朝倉　京子**

開会挨拶　東北大学　総長　**里見　進**　13:00～13:05

来賓挨拶　文部科学省　研究振興局長　**小松　弥生** 氏　13:05～13:10

第Ⅰ部　13:10～14:15

第２回 澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（澤柳記念賞）授賞式及び講演会

Ａ賞（本賞）　日本大学　薬学部薬学研究所　上席研究員　**大坪　久子** 氏

Ｂ賞（奨励賞）　新大 Wits 代表　新潟大学男女共同参画推進室　准教授　**中野　享香** 氏

東北大学における男女共同参画の取り組みについて

東北大学男女共同参画推進センター　副センター長（医工学研究科／工学研究科　教授）**田中　真美**

---------- **休憩**（14:15～14:25）----------

第Ⅱ部　14:25～15:25

講演座長　生命科学研究科　教授　**福田　光則**

特別講演Ⅰ　「近代科学の歴史とジェンダー」

三重大学　名誉教授　**小川　眞里子** 氏

---------- **休憩**（15:25～15:35）----------

第Ⅲ部　15:35～16:35

講演座長　総長特別補佐（男女共同参画担当）**大隅　典子**

特別講演Ⅱ　「男女共同参画は科学と高等教育をいかに変革できるか」

明治学院大学　社会学部社会学科　教授　**柘植　あづみ** 氏

総合討論　16:35～16:50

講評・閉会挨拶　東北大学男女共同参画委員会　委員長　**植木　俊哉**　16:50～17:00

来賓紹介

文部科学省　研究振興局長　**小松　弥生** 氏

1981年、京都大学法学部卒業後、文部省に入省。掛川市教育長、広報室長、仙台市教育長、初等中等教育局幼児教育課長、高等教育局医学教育課長、内閣府政策統括官付参事官、文化庁伝統文化課長、文化庁政策課長、科学技術・学術総括官、文化庁文化部長、国立美術館理事を経て、2015年８月から現職。

過去の澤柳記念賞受賞者紹介

第1回（平成26年度）澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞

「日本の男女共同参画社会の推進を牽引する先導的活動について」

明治大学法科大学院　教授　**辻村　みよ子** 氏

同氏は憲法学・ジェンダー法学を代表する学者の一人として、東北大学における男女共同参画実現に向けての礎を築きました。さらには、21世紀 COE プログラム、グローバル COE プログラムの拠点リーダーや、内閣府男女共同参画会議・専門調査会委員等を歴任し、学内外に研究成果や政策提言を発信しながら日本の男女共同参画社会推進を牽引してきました。この功績は特に顕著なものであり、ここに顕彰いたします。

第1回（平成26年度）澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞

「サイエンス・エンジェル修了生を中心とした有志団体による男女共同参画への取組み」

SA 輝友会（エスエーきゆうかい）

同団体は東北大学サイエンス・エンジェル※であった大学院修了生を中心とする自主的な活動団体として、修了後も研究分野や職種を超えて交流を続けています。自ら科学イベント等の企画を行うほか、現役学生の SA 活動や進路に関するアドバイスを行うなど、ロールモデルとしても貴重な役割を果たしています。このような異なる分野を横断した理系の女子大学院生修了生による活動の今後の一層の活躍を期待し、奨励賞として顕彰いたします。

※サイエンス・エンジェル（SA）…東北大学の自然科学系女子大学院生が、女性研究者のロールモデルとしてセミナーやイベントに参加し、科学の魅力・研究のおもしろさを伝えている。

第2回澤柳政太郎記念
東北大学男女共同参画賞審査結果及び講評

男女共同参画委員会
委員長
植木　俊哉

本学では、平成15年度より10年間にわたり、東北大学における男女共同参画を推進するため、「東北大学男女共同参画奨励賞（通称：沢柳賞）」として、教職員及び学生の皆さんの男女共同参画に関連する研究や活動を奨励してきました。

昨年、さらなる男女共同参画社会を目指し、沢柳賞を改め、「澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（通称：澤柳記念賞）」を創設しました。この賞は、アカデミアにおける男女共同参画の先駆として、各分野で活躍し多大な貢献をなした方々を選考し顕彰する目的で設置しました。これまでの沢柳賞と異なり、学内だけでなく学外からも広く公募することで、より多くの方へ男女共同参画推進の理念を広げたいと考えています。

名称は、東北大学の理念である「門戸開放」の方針を打ち出し、全国に先駆けて女子学生に帝国大学の門戸を開く素地を作った初代総長澤柳政太郎の功績にちなんでいます。澤柳記念賞は、本賞のほか、42歳以下の若手を奨励する目的で設置された奨励賞の2部門からなります。審査においては男女共同参画に関連する研究や活動の奨励、男女共同参画社会実現へ向けての積極的な提言や企画を重視しています。

厳正な審査により、以下のように受賞者が決まりましたので、審査の講評とあわせてご報告いたします。

第2回（平成27年度）澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞

「日本の理工系女性研究者支援を牽引した先導的活動」

日本大学　薬学部薬学研究所　上席研究員　**大坪　久子** 氏

同氏は理系分野における女性研究者の先達として、所属する大学の環境整備や学会での提言等、男女共同参画の推進に精力的に取り組んできており、こうした取組が政府による女性研究者の支援事業の創設につながるなど、日本における女性研究者の研究環境の改善に大いに貢献してきました。また、日本の理工系女性研究者が置かれている現状を国際的に発信し、著名な科学雑誌に取り上げられるなど、国内外を通じて数多くの業績を有しています。この功績は特に顕著なものであり、ここに顕彰いたします。

第2回（平成27年度）澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞

「“新大 Wits” による出前授業活動から生まれた男女共同参画多世代キャリア教育」

新大 Wits（しんだいうぃっつ）※

同グループは、中高生を対象として、大学院生による文理融合型の出前授業を積極的に行い、次世代の女性研究者の増加・活躍を促進するとともに、男性も含めた研究者全体の男女共同参画意識の醸成を図ってきました。また、出前授業の実施に留まらず、この効果等を科学的に分析し改善を図っており、今後の活動のより一層の発展を期待し、奨励賞として顕彰いたします。

※新大 Wits は、サイエンス・セミナー（出前授業）を行っている新潟大学大学院生の愛称

第2回「澤柳記念賞」受賞者

本賞

「日本の理工系女性研究者支援を牽引した先導的活動」

日本大学　薬学部薬学研究所　上席研究員　**大坪　久子** 氏

【講演要旨】

私の本来の専門は動く遺伝子（トランスポゾン）の分子生物学である。20代から30代の若い時期に、機会均等法施行後間もない米国の熱気のなかで研究生活を送り、自分自身の研究基盤を築いた。理工系分野の男女共同参画に関わることになったのは、2002年、日本分子生物学会の年会保育室設置の時にまで遡る。その後、複数の大学や学会、そして、理工系学協会の連携組織「男女共同参画学協会連絡会」で活動を続けてきた。私自身、研究と家庭の両立に苦しんだこともあり、そのような思いを後進にはさせたくないというのが動機の一つであった。ただ、在米当時、機会均等法に後押しされた若い女性研究者たちの明るく自然体の生き様を目にしていたこともあり、「日本でもいつかあのように・・」と潜在的に考えていたとは思う。連絡会では「大規模アンケートの解析→課題抽出→提言・要望作成→要望活動の展開」の繰り返しであった。手がけた提言の中には「子育て支援型研究員制度に関する提言」のように、後に政策（RPD 制度）に結びついた幸運なものもある。提言・要望活動の過程で私たちは「基盤整備」のみならず「リーダー育成」の必要性を確信し、学会活動において女性研究者を囲むバイアスとバリアの存在の「見える化」を試みた。その結果を英文で国際誌に発表したことが契機となり、Nature や Science 等の国際誌が日本の女性研究者の現状を何度か記事に取り上げてくれた。これはこれまでにない快挙であった。日本の女性研究者支援について国際語で発信することの重要性をあらためて実感することとなった。講演では、15年にわたる活動をたどり、その意義と今後の展望について述べる。

【主要著書・論文等】

・Homma MK, Motohashi R. and Ohtsubo H.: Japan's Lagging Gender Equality. Science Apr 26; 340（6131）: 428-30（2013）

・Homma MK., Motohashi R. and Ohtsubo H.: Maximizing the Potential of Scientists in Japan: promoting equal participation for women scientists through leadership development. Genes to Cells 18（07）: 529-532（2013）

・相馬芳枝・大坪久子・荒川薫：女性研究者を支援する取り組み - 男女共同参画学協会連絡会の役割 - Biophilia No.5 No.4（2009）

・大坪久子：男女共同参画学協会連絡会のこれまでの活動と女性研究者支援の今後　解剖学雑誌88:51-56（2013）

・大坪久子：Beyond the Bias and Barriers　～日米にみる女性研究者支援～
企画・制作：九州大学戦略企画室：九州大学・女性研究者養成システム改革加速事業「リーダー育成セミナー」講演記録、（2014年6月発行）

【略 歴】

1968年　九州大学薬学部薬学科卒業

1970年　九州大学大学院薬学研究科修士課程修了

1975年　博士号取得（薬学）九州大学大学院、論文博士

1970年　金沢大学がん研究所生物物理部門・助手

1974年　New York 州立 Stony Brook University 博士研究員、NIH 博士研究員

1979年　同上　研究准教授

1982年　東京大学応用微生物学研究所・助手

1994年　同上分子細胞生物学研究所・講師

2009年　日本大学総合科学研究所・教授、同女性研究者支援推進ユニット長

2011年　日本大学薬学部薬学研究所・上席研究員

2015年　沖縄科学技術大学院大学コンサルタント（男女共同参画担当）

その他、北海道大学女性研究者支援室・客員教授、上智大学女性研究者支援プロジェクト課題推進アドバイザー及びグローバルメンター、九州大学「女性研究者養成システム改革加速」事業・全学審査会外部委員等を歴任

第2回「澤柳記念賞」受賞者

奨励賞

【略 歴】

1996年3月　新潟大学理学部物理学科卒業

1997年4月　金沢大学自然科学研究科博士前期課程入学

1999年4月　金沢大学自然科学研究科博士後期課程進学

2002年3月　金沢大学自然科学研究科博士後期課程修了。博士（理学）の学位取得。

2002年4月～2008年5月　新潟大学自然科学研究科研究生。同教育人間科学部研究支援者。同自然科学研究科博士研究員。新潟県立女子短期大学非常勤講師。日本物理学会キャリア支援センター調査員。

2008年6月　新潟大学女性研究者支援室特任助教

2011年4月　新潟大学男女共同参画推進室准教授（現在に至る）

「“新大 Wits”による出前授業活動から生まれた男女共同参画多世代キャリア教育」

受賞者：新大 Wits（しんだいうぃっつ）
代　表：新潟大学男女共同参画推進室　准教授　**中野　享香**

【講演要旨】

「女性活躍加速のための重点方針2015」の第2項目「社会の課題解決を主導する女性の育成」において、女性の理工系人材の育成を推進することが明言された。このような日本の女性研究者を支援し育成しようとする動きは、2006年以降、文部科学省の「女性研究者支援事業」を機に推進され、それまで妊娠や出産などの様々なライフイベントによって研究者への道を諦めざるを得なかった多くの若い女性たちの前に、その道筋をつけた。その道を次の世代へと繋ぐべく、女性研究者自らが次世代の研究者を育成する活動を牽引することは、今後の女性研究者の増加・活躍のために不可欠であると言える。

新潟大学は2008年に女性研究者支援事業に着手し、次世代の女性研究者の育成を目的として、女性大学院生による出前授業「サイエンス・セミナー」活動を立ち上げた。2010年には社会科学を含めた広義のサイエンスを扱う文理融合型の活動として、2011年には男性も活動メンバーに含め、“新大 Wit's”の名称を付して、男女若手研究者の意識の醸成を図りながら未来の研究者を育てる活動として現在まで継続している。この活動は、男女共同参画の視点に立った大学院生教育プログラムに基づいており、セミナーの質を担保しつつ大学院生と中高生双方の成長を図る仕組みになっている。また、活動によって構築されるメンバー同士のネットワークは、メンバーが各地に職を得てからも維持され、結婚や子育てを乗り越えながら活躍する姿が現役大学院生のキャリア形成の一助となっていることから、この活動が男女共同参画多世代キャリア教育としても意義を持つものへと発展していると考える。講演では、これらの報告を中心に、男女共同参画における次世代育成の意義を述べる。

【主要著書・論文等】

[1] A comparative study of the effects of lecturer's gender in “Science Seminar”, Michika Nakano, Kohei Doi, Yuki Kusano, Maki Nishiyama, Takashi Sato, Proceedings of the 12th Asia Pacific Physics Conference, JPS Conf. Proc. 1, 018005 (2014)

[2] 出前授業を通じた大学院生の科学コミュニケーション能力養成　―理学系大学院生の特徴と傾向―，中野享香，大学の物理教育誌，Vol.19，No.2，pp.68-72，2013年07月

[3] 新潟大学発『女性大学院生によるサイエンス・セミナー(出前授業)』の取組とその成果，中野享香，三宅恵子，佐藤孝，五十嵐由利子，工学教育（J.of JSEE)，Vol.59，No.3，pp.88-92，2011年05月

[4] Symmetry and Z_2-Orbifolding Approach in Five-dimensional Lattice Gauge Theory，K. Ishiyama, M. Murata, H. So, K. Takenaga，Progress of Theoretical Physics，Vol.123，No.2，pp.257-269，February 2010

[5] Study on the nonperturbative existence of Yang-Mills theories with large extra dimensions, Shinji Ejiri, Jisuke Kubo, and Michika Murata, Phys. Rev. D 62, 105025, 23 October 2000

東北大学における
男女共同参画の取り組みについて

男女共同参画委員会
副委員長
男女共同参画推進
センター副センター長
医工学研究科／
工学研究科　教授
田中　真美

東北大学では、全学での男女共同参画の実現に向けた活動とともに、女性研究者がキャリアパスの障害を乗り越え継続して活躍するための支援として、平成18-20年度に「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」(文部科学省科学技術振興調整費：女性研究者支援モデル育成)、平成21～25年度に「杜の都ジャンプアップ事業 for 2013」(文部科学省科学技術振興調整費：旧女性研究者養成システム改革加速事業、科学技術人材育成費補助金）を実施しました。日本の大学として初めて女子学生を受け入れてから100年となりました平成25年には「男女共同参画推進のための行動指針」(本パンフレット裏表紙に掲載）を策定しました。この行動指針に基づいて、前述の事業を継承し、発展的展開を進めています。平成26年4月に男女共同参画推進センターを設立し、さらに、公募による同センターの愛称「TUMUG」やロゴマークの決定、またアカデミアにおける男女共同参画推進に貢献されている方を顕彰する澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（澤柳記念賞）の創設と第1回同賞の授与を行っています。男女共同参画委員会と男女共同参画推進センターは「行動指針」に基づき、1）両立支援・環境整備、2）女性リーダー育成、3）次世代育成、4）顕彰制度、5）地域連携、6）国際化対応、7）支援推進体制、の７プログラムを実施しています。平成27年には男女共同参画推進基金を新設しました。今後一層の男女共同参画の推進に向け邁進して参ります。

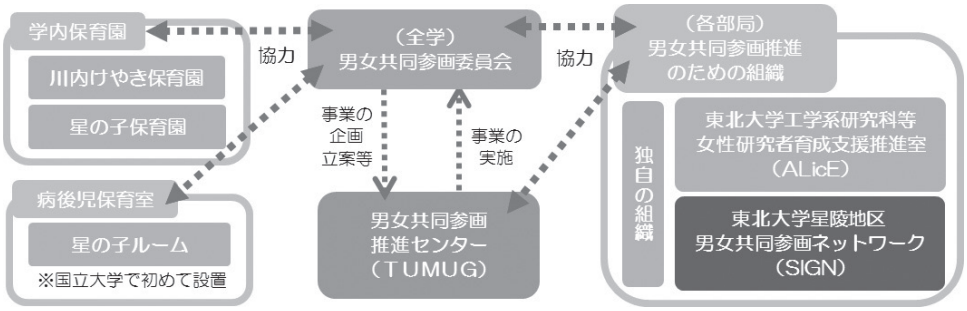


図１　男女共同参画・女性研究者支援の体制

表１　平成27年度男女共同参画・女性研究者支援事業（通称：TUMUG 支援事業）

	プログラム名	内容	対象部局
1	研究支援要員	研究支援要員雇用のために必要な人件費の補助（上限200万円）	自然科学系研究科
2	研究支援要員（シェア型）	採択者同士で事務補佐員（男女共同参画推進センターより派遣）をシェア	
3	ベビーシッター利用料等補助	研究、講義、出張時のベビーシッター利用料等の補助（上限10万円）	全部局
4	スタートアップ研究費	１年目100万円、２年目50万円の研究費を支援	全部局
5	研究スキルアップ経費	会議・シンポジウム等の旅費支援 開催地が海外：上限40万円、国内：上限15万円	全部局
6	サイエンス・エンジェル	高校出張セミナー、オープンキャンパス、科学イベント企画・実施	自然科学系研究科
7	仙台Ｉゾンタクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援	海外で開催される会議・シンポジウム等の旅費支援（上限15万円）	全研究科

特別講演 I

【略 歴】

1971年6月	東京大学教養学部基礎科学科　卒業
1971年7月	東京大学教養学部基礎科学科研究生
1972年3月	東京大学教養学部基礎科学科研究生修了
1972年4月	東京大学大学院理学研究科科学史科学基礎論修士課程入学
1974年3月	東京大学大学院理学研究科科学史科学基礎論修士課程修了
1976年4月	東京大学大学院人文科学研究科比較文学比較文化博士課程入学
1978年9月	東京大学大学院人文科学研究科比較文学比較文化博士課程退学
1978年4月	南山短期大学非常勤講師（1986年3月まで）
1985年4月	三重大学人文学部非常勤講師（1986年3月まで）
1986年4月	三重大学人文学部助教授
1993年4月	三重大学人文学部教授（至 2012年3月）
2012年4月	三重大学名誉教授

「近代科学の歴史とジェンダー」

三重大学　名誉教授　**小川　眞里子**

【講演要旨】

科学は、自然を観察することによって発見された客観的な事実によって構築されるものと、多くの人は考えておられるのではないでしょうか。科学的真実は発見されるべきもので、けっして発明されるものではないと。しかし、科学の歴史を振り返ってみますと、事実は往々にして発明？されているようです。科学的事実も社会的構築物であり、けっしてジェンダー・フリーとは言い切れないことを、科学史上のいくつかの事例から説明したいと考えています。

とくにその顕著な事例は、近代科学の形成期に見られます。18世紀末には人権思想の高まりと共に男女の平等観が芽生え、イギリスではメアリ・ウルストンクラフトが『女性の権利の擁護』、フランスではオランプ・ド・グージュが『人権宣言』ならぬ『女権宣言』、フランスほど自由主義の地盤が強固でなかったドイツにおいてさえ匿名ながら『女性の地位向上について』といった女性の完全な平等を支持する論説が現れました。ところがこれを打ち消す方向に作用したのが、当時の科学でした。

解剖学は、男女が平等には創られていないことを、観察された事実をもって示そうとしましたし、動物学は、女性が子産み子育てに専念すべきものとして創造されているという自然の説得力ある事実を発明しました。科学は歴史的に見てけっして男女に平等に開かれてきたものではありません。

このような科学の歴史的経緯を踏まえて、今日では歴史研究で有効なツールとなったジェンダー分析の手法を、今日の最先端の科学研究や技術開発に応用し、男女に等しく恩恵をもたらす Gendered Innovations が目指されています。歴史研究からの成果として、科学や技術の革新を展望したいと思います。

【主な活動】

2003年9月　お茶大 COE（ジェンダー研究のフロンティア）事業推進者（至2006年3月）
2006年4月　お茶大　ジェンダー研究センター客員教授（至2012年3月）

三重大学　学長補佐　（2007年度 入試広報・男女共同参画担当、2008年度 男女共同参画担当、2009～2010年度 女性研究者支援担当）
三重大学女性研究者支援室室長（2008年7月～2011年3月）
三重県男女共同参画審議会会長（2015年４月より）
名古屋大学非常勤講師（科学技術とジェンダー　担当）
科学とジェンダー関連の講義：早稲田大学、東京工業大学、お茶の水女子大学等。
「なぜ、女子に理系分野なのか」2012年女性研究者裾野拡大のための教員研修
「科学・技術教育と女性」岩手大学北桐ホール　2012年10月9日
基調講演「女性研究者の現状：世界・日本・三重」男女共同参画大学の実現に向けて　岐阜大学講堂　2012年12月5日

特別講演Ⅱ

「男女共同参画は科学と高等教育をいかに変革できるか」

明治学院大学　社会学部社会学科　教授　**柘植　あづみ**

【講演要旨】

これまで「男女共同参画」は、男女間の就業・昇進等の機会不均等、性別役割分業観に基づく女性のケア労働の負担とそれによる離職等、同一労働同一賃金の未達成などが課題・問題として掲げられてきた。男女雇用機会均等法が施行されて30年になるが、これらの問題はいまだ解消されずに存在し続けている。しかし何も変わってこなかったわけではない。大学を見る際に、教育・研究の場としての大学という視点が先にくるが、職場としての大学という視点は、研究所よりも遅れているように思う。職場として「男女共同参画」が進むことは、教育の場としても大きな意義がある。そして、それは女性研究者のみならず、男性研究者にとっても、環境改善になるべきだろう。

この講演では、まず、女性研究者をめぐる環境改善と課題を考える。つぎに、女性であること、男性であることが研究や教育にいかに影響するか（しないか）について具体的な事例を紹介しながら、そこにある課題を一緒に考えたい。そして、ケア労働をめぐる負担の軽減に、少子社会対策と高齢社会対策という「順風」と「逆風」について考える。最後に男女共同参画に加えて、「男女」という枠組みを越えた「共同参画」への試みが、科学研究（自然科学も人文社会科学も含む）と高等教育をいかに変革できるかについて述べたい。

【主な活動】

2000年～2004年　日本国際協力事業団イシュー別委員会（ジェンダー）委員
2009年～2011年　国際ジェンダー学会（旧国際女性学会）会長
2014年～　NPO 法人女性の健康と安全のための支援教育センター副代表理事
2014年～　日本学術会議第1部会連携会員、社会学委員会ジェンダー研究部会副委員長

（主な講演）2007年「人口政策に組み込まれる不妊治療―身体・医療・政治―」、日本医学会総会、2014年“Exploring Norms and Rational Choices Concerning Reproductive Technologies: Local Meanings of Having Children in Contemporary Japan”, Margaret Lock Conference: New Directions in Social Studies of Medicine, Science, and Ethics, East Asian Studies, Princeton University, NJ, USA.

【略 歴】

1983年3月　埼玉大学理学部生体制御学科卒業
1983年4月　埼玉大学大学院理学研究科生体制御学専攻修士入学、1985年3月同修了
1985年6月～1989年3月　三重大学医学部助手
1990年4月　お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間発達学専攻博士後期課程入学
1994年3月　お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間発達学専攻博士後期課程単位取得退学
1996年3月　お茶の水女子大学より博士（学術）号授与
1994年4月　北海道医療大学基礎教育部教員（専任講師、97年より助教授）
1999年4月　明治学院大学社会学部教員（助教授、2003年より教授）

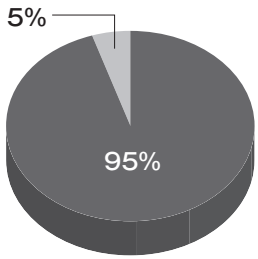
専攻は医療人類学。これまでに生殖医療を中心にして、患者・医療者へのインタビューから、技術が社会にもたらす課題と、社会がいかに技術の方向づけをしてきたのか、そこでの「選択」とは何かを分析してきた。主な著書、論文に『妊娠―あなたの妊娠と出生前検査の経験をおしえてください』（2009年刊、共著、洛北出版）、『生殖技術－不妊治療と再生医療は社会に何をもたらすか』(2012年刊、単著、みすず書房）など。

東北大学における男女構成比と推移（平成27年5月1日現在）

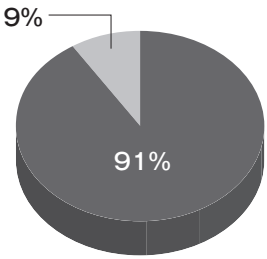
教員男女構成比

男性　女性

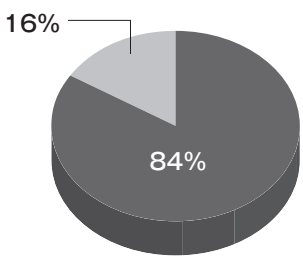
教授（計886名）



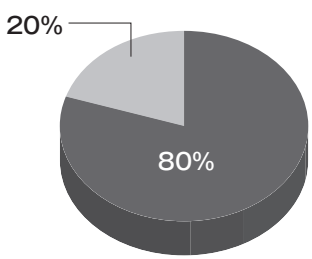
准教授（計748名）



講師（計167名）



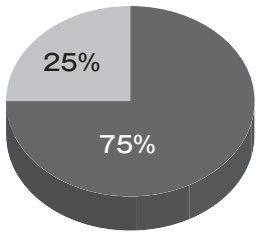
助教・助手（計1,377名）



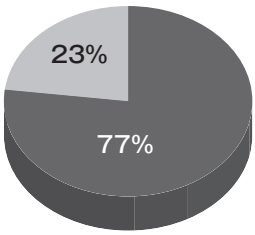
学生男女構成比

男性　女性

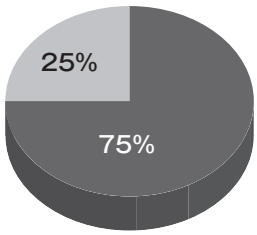
学部学生（計11,126名）



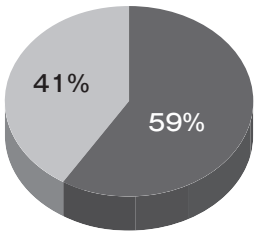
博士課程前期（計4,097名）



博士課程後期（計2,608名）



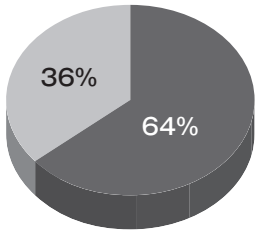
外国人留学生（計1,663名）



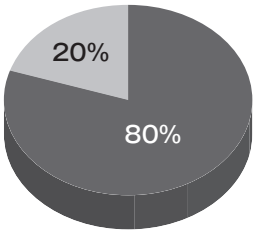
職員男女構成比

男性　女性

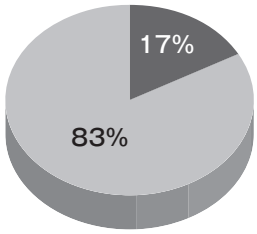
事務系職員（計1,112名）



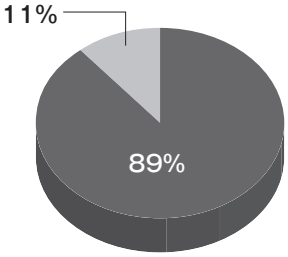
技術系職員（計503名）



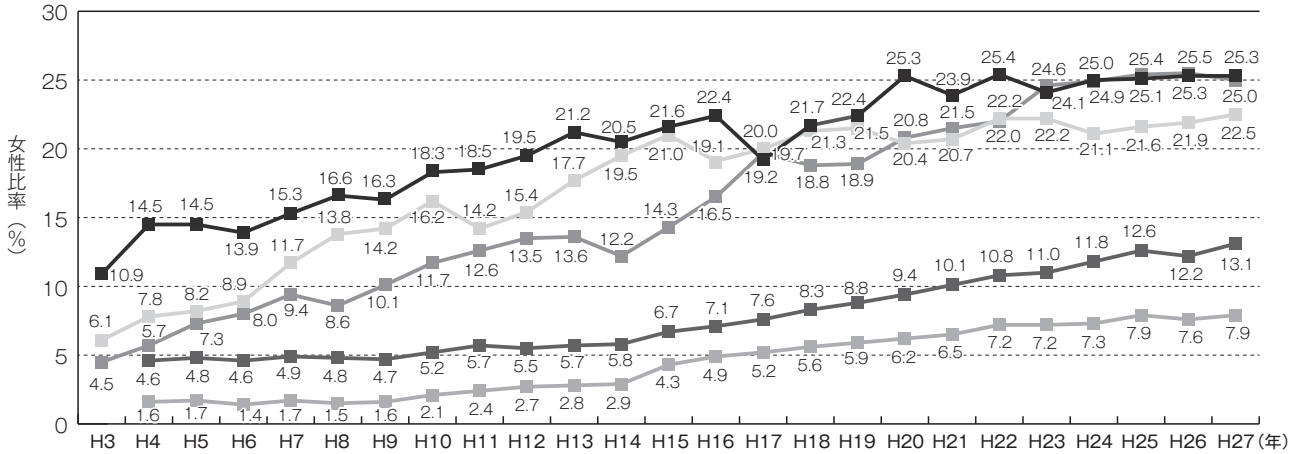
医療系職員（計1,623名）



その他（計9名）



男女構成比推移



MEMO

MEMO

東北大学における男女共同参画推進のための行動指針

東北大学は、1913年に日本で初めて女子学生3名の入学を許可した。その3名はやがて女性初の学士になるなど、本学は女性研究者育成の歴史に大きな足跡を残している。そのような歴史の中、戦前にあっては学問を志す全国の女性が「学都仙台」に集い、本学は帝国大学の中で最も多くの女子学生を輩出した。
そして、2001年に全国に先駆けて東北大学男女共同参画委員会を発足させ、「男女共同参画のための東北大学宣言」(2002年）のもと、全学的な男女共同参画の推進に向けた活動として、学内の環境整備や意識改革、学内外広報等に努めてきた。
また、2003年度に21世紀 COE「男女共同参画社会の法と政策」が、2008年度にはその成果を発展させたグローバル COE「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」が採択された。これらは、男女共同参画とダイバーシティ研究・教育のためのプログラムであり、研究・教育における男女共同参画の取り組みも全国に先駆けて進めている。
自然科学系分野では、2006年度から「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」を展開し、環境整備や次世代育成等に取り組むとともに、2009年度からは「杜の都ジャンプアップ事業 for 2013」により、理工農学分野の女性研究者の採用を促進し、そのリーダー育成を推進している。
このように、男女共同参画の包括的推進（理論整備・活動支援）において、我が国をリードする活動を展開している本学は、女子学生入学100年の歴史と背景をもとに、建学以来の理念の一つである「門戸開放」を継承する男女共同参画について、今後10年間の行動指針として以下の7項目を策定する。

【両立支援・環境整備】
本学構成員が、年齢性別等を問わず、仕事や学業と生活との両立を図ることができるように、意識の醸成に努め、子育て支援のための学内施設の充実や介護支援を含めた制度等の環境整備と周知を進める。

【女性リーダー育成】
アカデミアにおける男女共同参画の推進に向けて、女性研究者を積極的に採用・養成し、さらに学内および学会・社会のリーダーとして飛躍させるための支援・登用制度を整備する。

【次世代育成】
将来性豊かな次世代女性研究者を輩出するために、サイエンス・エンジェル（SA）活動を継続・発展することなどにより、学部生・大学院生を対象とした研究者使命の意識啓発と醸成に努め、さらに実体験を通して育成する施策を推進する。

【顕彰制度】
アカデミアにおける男女共同参画の先駆として、各分野で活躍し多大な貢献をなした方々を選考し顕彰するため、新たな「東北大学男女共同参画賞」を創設する。

【地域連携】
東北地方の中心に位置する大学として、東北地方の多くの大学、行政機関等との連携を進め、地域発展や震災復興事業等における男女共同参画を推進する。

【国際化対応】
ワールドクラスへの飛躍に向けて、グローバルな研究・教育体制に相応しい、外国人研究者・留学生を対象とした様々な両立支援策を講じ、国際的観点に基づいて学内の男女共同参画を推進する。

【支援推進体制】
上記の男女共同参画活動を円滑に推進するために、男女共同参画担当理事（若しくは副学長）と総長特別補佐（男女共同参画担当）を置き、さらに「男女共同参画推進センター」などの恒常的支援体制を整備する。

平成25年 8 月 8 日